

礼拝：2021年8月22日（日） 聖霊降臨節第14主日

交読：詩編46編

聖書：エレミヤ書5章20～25節

マタイによる福音書13章24～30節

説教：「神の勝利を信じて生きる」 佃 雅之

賛美：賛美歌361

マタイによる福音書13章は、いくつかのたとえ話が集められている箇所です。キリストはたとえを用いて、多くのことを群衆にまた弟子たちに語りかけました。

「悔い改めよ。天の国は近づいた」これが活動を始めたキリストの第一声でした。天の国とは、神の国のことです。神の支配という意味があります。神の支配、それはつまり神が生きて働いてくださっているとは、どのようなことであるかを明らかにするために、今日の箇所ではキリストは「天の国は次のようにたとえられる」と語り出します。

天の国、神の支配は、一人の人がやって来たことから始まります。その人は農夫です。たとえの中で「だんなさま」とも呼ばれていますから、畑の持ち主のようです。「ある人が良い種を畑に蒔いた」とキリストが語っています。畑に蒔かれた良い種は麦の種です。麦は、当時この地に暮らす人たちにとって、もっとも馴染みのものの一つでしたから、身近な事として感じることが出来たのでしょう。良い種を蒔いたら、必ず良い麦が収穫できるかという、そうとは限らないとキリストは言われます。良い種が蒔かれた畑に、毒麦も現れたからです。神の支配が現れる時、敵も現れると言うのです。ある説教者は「神の濃く働くところには、悪魔も濃く働く」と語りました。良い種が蒔かれれば、それでいいかと言うとそうはいきません。よい種に抵抗するものが必ず現れると言うのです。神が種を蒔くなら、悪魔も同じように種を蒔くと言うことでしょうか。いずれにしても、「福音が宣べ伝えられると、その宣べ伝えを聞いた人たちの間に、まったく逆のものが表れてくることがある」とキリストは言うのです。

毒麦は麦とよく似た害草で、当時の人は「麦が魔法で変えられた」と言うほど、その姿はそっくりだったと言われています。特に新芽の頃は、殆どその見分けがつかないようです。しかし、毒麦を食べてしまうと、めまい、はきけ、しびれを起こす。軽度ではあっても、その名の通り毒性があるのです。しかも、毒麦は「麦より成長が早い」という、やっかいな特質を持っていたそうです。毒麦の方がタフだからです。雑草の方が強い根を持っていることが往々にしてありますから、畑で良い麦を育てようとするなら、雑草は手間を惜しまず抜かなければなりません。しかし、主人は「毒麦を抜くように」とは言わず、「刈り入れの時まで、そのままにしておく」と言うのです。主人は「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」と命令しています。麦と毒麦は、成長すると互いに根が絡んでいるので、毒麦と思って抜くと麦も抜けてしまうことがあるからです。ここでキリストが語られているのは、現実の農作業のことではありません。

天の国、神の支配のことです。この世には悪い者がいる。それは、教会をも含んだこの世です。しかし、この世のみならず、どうして神の畑にまで悪い者がいるのか。なぜ、神が敵の侵入を許し、その存在をそのままにしておかれるのか。キリストは、ここでは答えていません。しかし、この世界にも、教会にも悪い者がいる。サタンの働きがあるのは現実でしょう。このたとえ話を伝えた第一福音書記者マタイの属していた教会にも、伝道の困難があった。教会の一致を阻むような出来事が多かった。それは、まるでサタンの仕業としか思えないような、教会の中での言い争いや分裂があったのかもしれない。マタイは、この問題を福音に照らして理解し、福音を前進させて行くために、言い伝えられてきたキリストの言葉を思い起こし、固有の記事として、このたとえ話を書き記したのでしょうか。マタイが伝える「毒麦」の存在を、私たちはどのように理解すればいいのでしょうか。

ある神学者は、この畑に毒麦が蒔かれた意味を「完全主義への誘惑だ」と言います。信仰者が、熱心になればなるほど、この世界も教会の中にも、聖書の教えと現実の世界の隔たりに、憤りを感じることはよくあることです。自分よりも未熟と見える人が言うことは、信仰者してふさわしくない。宗教的でないと感じてくる。そういう人は、いつの間にか自分だけが特別な者のように思えてくる。人間のすることには欠けのあることを忘れて、神の前に自分の信仰は完成したと思い込んで、自分だけの正しさを誇ろうとするようになってしまいます。そうなる自分以外の者が、毒麦に見えてくるようになる。その人は、自分の目に毒麦と見える存在が許せなくなり、自分で駆除し始める。しかし、人間が神の畑に手を付けば、必ず分裂が起こります。まさにサタンの期待通りということでしょう。今日の箇所では「行って抜き集めておきましょうか」という僕に対して、主人は「育つままにしておきなさい」と言われます。問題を性急に解決しようとするなという意味です。「育つままにしておきなさい」と言うキリストの言葉から、今日のたとえ話の主題を「忍耐の教え」という人は少なくありません。私たちはどうでしょうか。キリストの「育つままにしておきなさい」とのみ声に従って、時を待つ、忍耐することが出来ているのでしょうか。間違ったこと、愚かなことに、自分の目に毒麦だと映るものを取り除くために、麦と毒麦の選別にやっきになって、毒麦を抜こうとして、麦まで一緒に抜いていないでしょうか。もっと冷静になって見つめるなら、私たちの中に、麦と毒麦が共存している、混在していることもあるでしょう。私たちが良い麦であるとは限りません。もしかしたら、私たちが毒麦かもしれません。そもそも私たちは、麦と毒麦を見分ける力を本当に持っているでしょうか。見分ける力を持たない私たちが、毒麦を抜き始めたなら、そこに起きることは人間の悲劇です。この世の中や教会の中で、人間的に言い争って、人間的に毒麦を抜き取るうとしてはならない。人間が裁いてはならないのです。悪を裁くのも、罪を赦すのも、神だけの権威であるからです。それを人間が取って代わろうとするなら、人間の地獄が、人間の悲劇が広がります。結果は毒麦と一緒に麦も抜き取ることになり、人間のすることには、必ず欠けがあるからです。大切なことは、神の裁きへの信頼です。裁きの時はすぐに来ないとしても、必ず訪れます。

この世で罪を犯しながら、罰を免れている人がいるかもしれません。しかし、それは人間的な見方であって、最後に必ず、主によって区別されることになります。「まず、毒麦を集め、焼くために束にする」これが毒麦の末路、悪い者の結末です。神の裁きの正しさを信じることです。毒麦が蒔かれ成長するのは敵の仕業です。しかし、良い種も蒔かれ成長します。麦と毒麦は、終りの日まで共存しながら成長するのです。天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるのです。注意すべきことは、ここでキリストは、種が刈り入れの時までどのように育つか、麦と毒麦がどのように違っていくか、その過程についてはまったく語っていないことです。よくよく考えれば、どちらが麦でどちらが毒麦かは、刈り入れの時まで分からないのです。はっきりしていることは、主の御前で私たちは誰もが罪人に過ぎないということです。罪人の私たち一人ひとりが赦され、生かされるのです。福音のために用いられています。それは、不思議なことです。しかし、確かな神の恵みです。不思議としか言いようのないことだからこそ、理解しがたい現実こそが、私たちからは測り難い神の支配、神が生きて働いてくださっていることを、はっきりと示してくれることもあるでしょう。

神の不思議な御業については、この教会に連なっている私たち一人ひとりが、自分のこれまで歩んできた生涯を福音に照らすことで、鮮明にすることができます。私のことに照らすなら、このような私とキリストが出会ってくださり、キリストが一方的に神の国へと招いてくださった。恥ずかしい限りですが、福音とは真逆の生き方をしていた私を、キリストが選んで、信濃町教会の説教者とした。これほど不思議なことはありません。今日の 25 節に「人々が眠っている間に、敵が来て」と書かれています。私が眠っている間に、キリストが来てくださったのでしょうか。それほどキリストの働き、福音の力は不思議なことです。私は時に思います。なぜキリストは、なかなか私と出会ってくださらなかったのでしょうか。なぜ主は、私を長い間、この世に放置されていたのか。その答えが、今日のたとえ話を見つけることができます。人間には、時が来なければ、分からないことがあるからです。刈り入れの時は、一粒一粒に、一人ひとりに違いがあるのでしょうか。見ても認めず、聞いても悟らない者に、人間が声を高くして、一生懸命話しても無駄なのです。私が分からせてみせると意気込んだところで、ダメな時はダメなのです。いくら力んだところで、真理を悟らせることは、人間にはできないものです。私たちに出来ること、するべきことは、キリストの「育つままにしておきなさい」という言葉に従って、時を待つ、忍耐することです。そうすれば、良い麦を引き抜くことはありません。

キリストは最後まで十字架の死に至るまで、弟子たちの裏切りに耐え、迫害に耐え、すべてに耐えて、裁きの時を待ちました。最後まで祈りました。この方の蒔いた良い種、十字架の言葉、主の福音が、毒麦の中にあっても、敵の中にあっても、育って実を結ばないはずはありません。私たちがたとえ「目があっても見えず、耳があっても聞こえない民」であっても、主ご自身が蒔かれた種であるのですから、必ず成長します。私たちの目には見えなくとも、種は蒔かれていないのではなく、成長

しないこともなく、無力なのでもありません。私たちの主人は、そのことを確信していますから、収穫の時まで、手を付けずに放っておくことができます。決して毒麦に負けることはないことを知っているのです。良い種を蒔いた、主の自信の現われです。そして主は、刈り入れの時を期待しています。期待するということは、待つことができるということです。主なる神は、良い種が蒔かれた私たちがどんな実を結ぶか、期待しつつ、希望を持って見守ってくださっています。

私たち一人ひとりも、キリストによって良い種として選び取られ、信濃町教会という神の畑に、蒔かれた一粒の種であります。キリストが蒔いた種は、時が来れば芽が出て実ります。キリストは祈りつつ、多くの収穫を期待して、種を蒔かれました。その期待が実現した時、天の国、神の支配が目に見える形を取って現れます。それが、この世にある十字架のもとに立つキリストの教会です。教会は、神の国を先取りして、この世にあっても、神の支配を体現している神の畑であるからです。教会に連なる一人ひとりが、自分も、隣人も、神の蒔かれたものだとすることを自覚し、その存在と出会いを神に感謝し、形を成してきたのが教会であるからです。しかし、悪魔も働くでしょう。終りの時まで、色々なことが起こるでしょう。その度に、私たちも色々混乱し揺れ動くでしょう。けれども、心配することはありません。主は私たちに「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉にいれる」と約束してくださっています。主は、終わりの日に悪い者を裁き、良い麦を大切に守ってください。私たちは、主が蒔いてくださった種を、一心に育てていけばいいのです。苦難の時こそ、不条理だと思ふ時こそ、神の勝利を信じて生きることです。御言葉にすぎることです。私たちの生涯には、思いも寄らないことが起こります。不幸が連続することもあります。必ず信仰生活には、障がいが生じものです。その時こそ、これまで以上に神の言葉にすぎることです。キリストが、今日の私たちに求められていることは、困難なときこそ、神の勝利を信じて生きることです。私のような者を生かし、赦し、復活させてくださるキリストに信頼して、キリストの体である教会にとどまり、忍耐をもって主にお任せしましょう。

愛するみなさん、祈りを合わせましょう。

聖なる神。悪が支配しているとしか思えない世界であっても、あなたの支配が実現していることを信じていることができるように私たちの信仰を確かなものとしてください。この世の誘惑や罪が、私たちを主イエス・キリストから引き離さそうとするときこそ、私たちが御言葉にすぎり、主の勝利を信じてことができますように。終りの日まで、十字架の苦しみに耐えたキリストが私たちと共にいてください。主よ、教会を支えてください。主キリストの御名によって祈ります。アーメン。

讚美：讚美歌 531

献金 主の祈り

黙禱